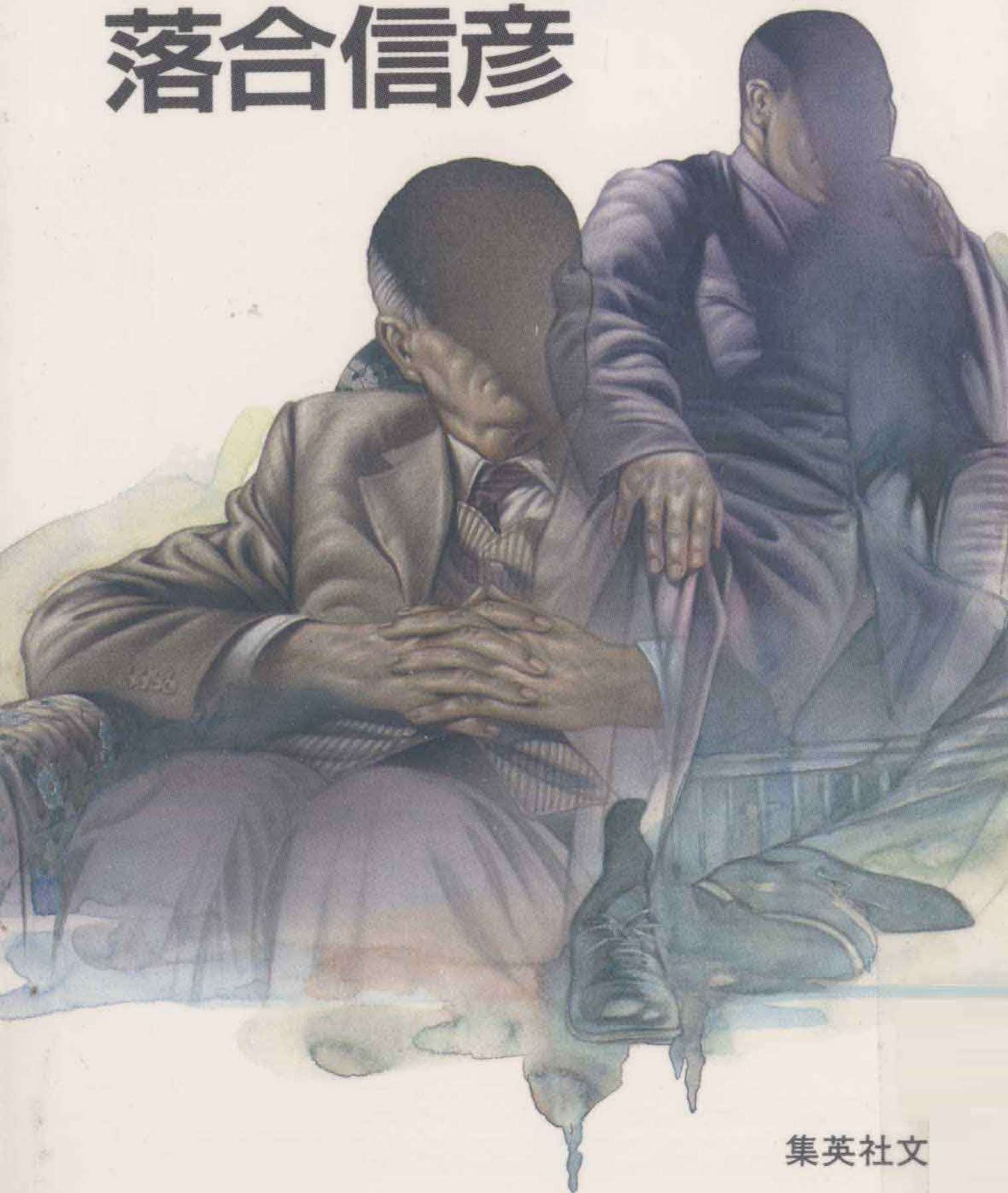


二人の首領^{ドン}

落合信彦



集英社文

 集英社文庫

ふたり^{ドン}
二人の首領

1988年 9 月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

1989年 4 月25日 第4刷

著 者 おち あい のぶ ひこ
 落 合 信 彦

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
 会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6393 (販売)

(230) 6080 (製作)

印 刷 大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

集英社文庫

二人の首領

落合信彦



集英社版

目次

まえがき	五
二人の首領	一三
北京より愛をこめて	一五
I 革命の武器・アヘン	一七
II 黄金の三角地帯	一八

写真提供

W
W
P

共同通信社
産経新聞社

まえがき

“二人の首領^ド”は“二〇三九年の真実”と並んで私にとって最も想い出の深い作品である。ある意味で私の人生の節目ともなった作品と言えるからだ。

高校を出てすぐにアメリカに渡った時、いつの日かジャーナリストになるなどとは夢だにしていなかった。大学院を終えて身を投じたのが地上最大の丁半バクチといわれるオイル・ビジネス（アップ・ストリームⅡ試掘・採掘）。一度オイルの世界に手を染めたら他の商売はできないとある先輩が言ったがこの言葉の真実味を感じとるのにそう時間はかからなかった。一年もしないうちに私はオイルのとりこになっていた。

オイルには私の興味を引くすべての要素があった。国際政治情勢の流れを的確に判断すること、コンスタントに変化する経済環境をつかむこと、産油国の政治状況と指導者層間の人間関係の構図を理解することなど。たとえばどんなポテンシャルティーのあるコンセ^益ッションであつてもその国の政治状況が極端に危険性をはらんでいていつクーデターが起

きてもおかしくない状況にあればその権益は無に等しい。しかし、いかにその国の政治状況が悪くても国際情勢が極端に悪化した場合（たとえば第四次中東戦争）はその権益を“獲り”に出なければならぬ時もある。

これらの要素すべてをクリアーしたとしても最終的に油が出るかどうかは掘ってみるまではわからない。何十万時間ものマンパワーと何百万ドルもの金を投資してやっとボーリングが完了しても塩水がふき出してくる時もある。これが石油が地上最大の丁半バクチといわれる所以だ。

当時西側の工業基盤は九〇パーセント石油の上に成り立っていた。アメリカは言うまでもなく高度成長期に入った日本や西ドイツなどは安い原油をガブ飲みしていた。オイル・ビジネスの将来はバラ色に見えた。

当然、私はオイル・ビジネスに一生を捧げる気持になっていた。しかし、石油をとりまく国際情勢はそれほど甘くはなかった。この間の事情に関しては拙著“石油戦争”や“アメリカよ！ あめりかよ！”で記しているので省略するが、一言で言えばリビアでのカダフィの出現とそれにもなうOPECの一枚岩化が情勢を急変させてしまったということだ。西側石油会社と産油国の関係がそれまでとは逆転して後者が主導権を握るのははや時間の問題だった。メジャーや大インデペンデントならともかくわれわれのような弱小企

業ではとうてい太刀打ちできるわけがない。こう判断した私は会社を売り払うようオーナー（一緒にビジネスを始めた友人の父親、友人は六八年ヴェトナムのダクトで戦死）に進言した。その進言が受け入れられて会社が売却されたのが一九七三年一月。それから九カ月後に起きたのが第四次中東戦争とそれに続くエンバーゴと第一次オイル・ショック。私の案じていた通りその後十年余りにわたって産油国は世界にその力をまざまざと見せつけることになった。

会社売却後しばらく、私は日本とアメリカを行ったり来たりしていた。一年の半分をアメリカで残りの半分を日本で過すといった具合だった。アメリカの友人たちからいろいろな仕事の話を持ちかけられたが乗ってみたいと思うほど魅力のある話はなかった。しかし、何かやらねばという気持は大きかった。

いろいろ考えたあげく手をつけたのが国際ダイレクト・メールの仕事だった。商品は東洋的な痩身術。ペーパー・プロダクトだから印刷代と切手代しか元手はかからない。アメリカ人の八五パーセントが肥満体だからマーケットは無限に近い。しかし、アメリカ人は平均して一日五通はダイレクト・メールを受けとるから並の手紙ではくず箱に捨てられる。日本から送るという意味がここにある。はるばる海外から来た手紙ならたとえそれがダイレクト・メールであってもまず十人中九人は開ける。開けさせたらこっちのものである。

普通ダイレクト・メールのコンヴァージョン・レート（返信率）は二・五パーセントから良くて四パーセントと言われている。ところが私の場合は八五パーセントという驚異的な数字だった。私に名簿を売ったニューヨークのネーム・リスト・カンパニーの役員がダイレクト・メール史上前代未聞の出来事とビックリしたほどだ。

この商売は六カ月続けたが結局やめてしまった。金にはなるが妙味に欠け、しかもなんのギャンブル性もない。勝つとわかっていゝ勝負を何回繰り返しても意味はなかった。

それから手をつけたのがアメリカの不動産を日本で売ることだった。当時すでに日本政府は外貨の持ち出し規制を撤廃していた。今でこそアメリカの不動産を日本で売ることとはめずらしいことではないがあの頃は全くのニュー・ビジネスだった。

ダイレクト・メールと同様この商売もズバリ当たった。だがやはり続けたいと思うだけのおもしろ味はなかった。自分の考えと計画が正しかったという満足感だけで十分だった。

ダイレクト・メールも不動産も所詮は単なる金儲けにすぎず自分のすべてをぶつけるに値する仕事とは思えなかった。スケールといい内容といいオイル・ビジネスとはかけ離れすぎていた。

再び元のぶらぶら生活に戻ったがそれほど焦りはなかった。じつくりと考えれば何かあるという思いだった。

当時、私は月に一度は必ず牛場信彦元駐米大使と食事を共にしていた。彼とはアメリカ時代からの付き合いで日本に帰って来てからも何かと親しくしてもらっていた。牛場氏は食事の度に彼の親しい友人を伴ってきた。今にして思えば彼は日本社会にうとい私にいろいろな人を紹介することによって私のコンタクトの幅を拡げてくれていたのである。この方法で牛場氏が紹介してくれた人のひとりに当時文藝春秋社社長の池島信平氏がいた。

私がジャーナリズムの世界に入るキツカケとなったのがこの池島氏との出会いだった。国際政治に関して何か書いてみないかという池島氏の誘いを軽く受けはしたものの私には文章を書ける自信は全くなかった。しかし、オイル・ビジネスを通して実際に国際舞台で生きてきたという経験はあったし、その頃つちかったさまざまな情報ネットワークは持っていた。この経験と情報網は普通のジャーナリストが持とうと思っても持てるものではない。この自負心だけが支えだった。

初めのうちは文藝春秋本誌に書いていたが、それらはごく散発的なもので本格的なジャーナリストとしての活動とはほど遠かった。その頃はまだジャーナリズムで生きていくなどとはおよそ考えてもいなかったし、単に道楽として物を書いているという感じしか抱いていなかった。

本格的にジャーナリストイックなレポートとしてとり組んだのが本書に載せた「二人の

首領^ド”だったが、その反響の大きさには我ながら驚かされた。活字は生き物と感じさせられたのはこの時である。自分が取材した結果が何十万という読者の目にさらされ、轟々たる反響が巻き上がる。それはあたかもボーリング完了時に黒い水がふき上がる時のぞくぞくとした感じに似ていた。久しぶりに味わう充実感だった。

活字の妙味と同時にもうひとつ当時の私の胸に強く焼きついたものがある。それは池島氏や田中健五氏（現・文藝春秋社社長）などジャーナリズムの世界に生きる男たちの勇気と真剣さだった。彼らは決してハイ・スタンダードを求めて正義を追求するジャーナリストなどというそぶりはみじんも見せない。その態度には力みもなければ大上段にかまえるところもない。田中氏などはよく自分は社会の野次馬にすぎないと言っていた。しかし、大新聞さえもでき得なかった“田中金脈”のように突くべきところはちゃんと突いているし、“二人の首領^ド”のようなコントロヴァーシヤルなレポートに対しても全面的にバックアップ姿勢で臨んでいる。（“二人の首領^ド”が発表された時、残念ながら池島氏はすでに故人となっていた）このような彼らの姿勢が私の目には強烈な新鮮さをもって映った。ジャーナリズムとは自分が考えていたよりはるかに素晴らしく男が全力を投じるに値する世界なのだということを教えてくれたのが池島氏であり田中氏であった。

こんなわけで“二人の首領^ド”は私の第二の人生の出发点ともなった作品だったと言って

も決して言い過ぎではない。

この作品についての解説はあえてしまい。ただ読者諸氏にはこれを読んでその後のロッキード事件の進展と結末、そしてアメリカ社会内での権力の推移状況とをじっくりと照し合わせてもらいたい。また拙著「二〇三九年の真実」をすでに読んでいる読者はこの「二人の首領」が前者のプロローグ的な役割を果していることに気付くと思う。

「北京より愛をこめて」は「二〇三九年の真実」発表後の第一作だったが、当時は日本中が日中国交回復にわき返り、連日政治家や経済人が北京詣でを繰り返していた。だが当時本当に中国という国とその内情を知っていた者が一体何人いただろうか。私はなにも日中国交回復に反対したわけではない。ただもう少し冷静な目で事態をとらえ中国という国を知っておくべきと考えただけのことである。

「二人の首領」も「北京より愛をこめて」もその取材には多大なマンパワーと時間がかけられた。書き手の立場から言えばこれらの作品がここに文庫本として登場することに大きな喜びを感じている。作者としてはこれらの作品に十分な自信を持ってはいるが、その良し悪しの評価を下す資格は私にはない。それができるのはあくまで読者諸氏のみなのである。

二人の首領

ロッキード事件がアメリカ議会でとり上げられてから丁度一周年にあたる一九七七年の二月四日、サンフランシスコ市のコモンウェルズ・クラブに於てあるスピーチが行われた。スピーカーはロッキード社の新会長ロバート・ハークである。その中で彼はロッキード社の優秀性と永年にわたってアメリカ防衛に果してきた貢献度を説き、最後にこう結んでいる。

「前経営陣（ホートン、コーチャン）は合理的でこそあったが、決して馬鹿ではなかった。彼等は我社の能率性を高めるためすばらしい貢献をなしたと同時に国家に対する奉仕をも全うしたと私は信じます。ある種の人々はある特定の大統領がホワイトハウスにいることによって安心して眠ることができます。あなた方はロッキード社があるからこそ安心して眠れるのです。」

たいした自信である。ロッキード事件など屁とも思っていない感じすらする。と同時に